

早稲田大学大学院政治学研究科

博士論文審査報告書

博士号請求者 村田 玲

博士号請求論文 「喜劇の誕生——マキアヴェッリの文芸諸作品と政治哲学」

論文形式 A4版1段組215頁、目次1頁、文献表、10頁

受理決定日 2014年06月18日

口頭試問実施日時 2014年11月05日 13:00-15:25 於：3号館915教室

報告書作成 2014年12月06日 最終稿完成

審査報告

1 論文の構成

「喜劇の誕生——マキアヴェッリの文芸諸作品と政治哲学」

目次

序論 マキアヴェッリ問題

第Ⅰ章 マキアヴェッリ前史

- 第ⅰ節 笑いと喜劇に対する倫理学、および政治学の古典的態度の瞥見
- 第ⅱ節 中世期における笑いの抑圧、および管理の諸形式と神聖喜劇の展望
- 第ⅲ節 文芸復興期における笑いの無条件的解放と人間喜劇の展望
- 第ⅳ節 1400年代末年のフィレンツェ市における宮廷文化と民衆文化

第Ⅱ章 マキアヴェッリの文芸諸作品

- 第ⅰ節 喜劇制作の伝記的背景、ならびに悲劇の滑稽化としての喜劇
- 第ⅱ節 喜劇『マンドラーゴラ』の筋、あるいは策略と人間喜劇
- 第ⅲ節 寓話『大悪魔ベルファゴール』、および喜劇『クリツィア』による補完

第Ⅲ章 人間喜劇と新しい政治学

- 第ⅰ節 マキアヴェッリ倫理学の再検討、あるいは賢慮としての力量
- 第ⅱ節 短編小説『ジェータとピッリア』と『君主論』の教説
- 第ⅲ節 『ディスコルシ』の第Ⅰ巻における伝統批判、すなわち悲劇の回避
- 第ⅳ節 『ディスコルシ』の第Ⅰ巻における伝統批判、すなわち限界の超越

第Ⅳ章 人間喜劇と革命の原義

- 第ⅰ節 国制の循環論とローマ史の悲劇性、そして人間喜劇のアポリア
- 第ⅱ節 大洪水の浄化作用の模倣、そして人間喜劇のアポリアの克服
- 第ⅲ節 『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の主題、すなわち始源への回帰と革命の原義

結論 悲劇作者と喜劇作者

文献表

2 論文の概要

本論文は、20世紀の最後の4半世紀以後におけるニコロ・マキアヴェッリ政治思想の研究に大きく2つの潮流、すなわち、(A)古典古代と聖書宗教の伝統からの離脱の契機を見出そうとする潮流と、(B)文芸復興期に流行した共和主義思想の反映を見出そうとする潮流と

を見出し、前者の研究動向への貢献を目的とする。本論文の独創性は、マキアヴェッリの文芸諸作品、とくに 2 篇の喜劇作品の観点から、その政治哲学の革新性を剔抉しようとする方法にある。文章家としてのマキアヴェッリが生前に博したおそらく最高の名声は、「喜劇作者」としての名声であったろう。しかしマキアヴェッリ研究史上、2 篇の喜劇作品に関する研究は極めて寡少であるのみならず、それら研究もまた微細を穿つ伝記的関心に終始するか、あるいは劇中に確かに看取される諸々の政治的主著の残響を指摘するに留まってきた。これまでのところ、喜劇作品を『君主論』および『ディスコルシ』と少なくとも同程度に重視した研究として、なんらかの顧慮すべき先例を挙げることは困難である。本論文は、マキアヴェッリ全集中、未開拓のまま残された最後の領域について考究を尽くすことが、2 つの政治的主著の革新性に関する最も精確な説明へと導くという仮定に基づいている。何故、マキアヴェッリの政治哲学は「偉大な伝統」すなわち古典古代と聖書宗教の伝統の双方と決裂するに至ったのか。

第 I 章では、① 以下の論述において頻繁に運用され、その基本構造を規定するところの「悲劇」、「神聖喜劇」そして「人間喜劇」の術語の意味内容が確定され、② マキアヴェッリの政治的主著の観点から喜劇作品を理解するのではなく、喜劇作品の観点から政治的主著を理解する手続きが正当化される。まず、古典古代の倫理学と政治学に親和的な「悲劇」tragedia の展望が概説される。論者によれば、文芸理論における定義上、「悲劇」が「優れた人間の模倣」であり、「喜劇」が「劣った人間の模倣」であるかぎり、古代倫理学は「悲劇」に対して好意的であり、「喜劇」に対しては一定の緊張関係にあるが、古代政治学を特徴づける「悲劇」の展望には、たんなる文芸理論上の定義の帰結以上の含意が指摘されねばならない。すなわちプラトンの『国家』の最善至高の国制すらも永久不滅ではありえず、やがては到来する破滅を回避することはできないという洞察から窺い知れるように、古典古代の伝統において、「永遠の真実在」はあくまで認識論上の意義を帯びていたにすぎず、人間的営為の脆弱性、その諸々の限界の痛烈な意識が看取される。人類の生と政治的営為に関する根源的悲観論こそが、古典的な「悲劇」の展望とされる。次に、古代末期以来、聖書宗教の伝統を特徴づける「神聖喜劇」commedia divinaの展望が概説される。聖書宗教は、地上における人類の生と政治生活に関する根源的悲観論を古典古代と共有している。しかし聖書宗教は、ダンテの叙事詩3部作『神聖喜劇〔神曲〕』において顕示されているように、古典的な「悲劇」の展望を、これに新たな楽観的展望を接合することによって超克する。ここにおいて、完徳の靈魂が死、滅亡、悲嘆を不可避とする地上から解放されたのちには、神的恩寵によって救済され、天上の「永遠の歓喜」を享受するという根源的楽観論が発生することになる。ただし、この大団円は此岸ならざる彼岸において、しかも人間的営為ならざる神的恩寵の介在によってはじめて成就するために、聖書宗教が抱懐したのは、あくまで端的な「喜劇」とは画然と区別されるべき「神聖喜劇」の展望であった。次に、14 世紀に発生し、文芸復興期に隆盛した「人間喜劇」commedia umanaの展望が概説される。中世盛期以降、それまで教会権力による抑圧の対象でありつづけてきた「笑いの文化」が次第に解放されてゆくのが観察される。これがついに怒涛の哄笑の大波となって絶頂に達するのが、ボッカチオの短編小説集『デカメロン』においてである。『デカメロン』の哄笑は、ある顕著な両義性を帯びている。つまりそれは、一方において法的、慣習的な、あるいは信仰上の古き諸規範に拘泥する暗愚蒙昧を愚弄する否定の哄笑

であるものの、他方において自然的欲望、とくに官能的性愛の歓喜を謳歌する肯定の哄笑である。それは、頑迷固陋な老人が旺盛な自然的欲望を抱く若者に敗退するという展開において、最も典型的に発現する。かかる両義的な哄笑は、中世都市の「祝祭」、典型的には「謝肉祭」carnival の時節に遍満した「民衆の笑い」が文芸諸部門へと侵入した帰結であると説明される。「謝肉祭」における「民衆の笑い」は、不断に反復される悦ばしき季節の更新、新旧の交代の心象と結びつき、あらゆる「古きもの」の死滅が「新しきもの」の生誕の契機を孕んでいるという、集合的民衆の不滅性、したがって根源的にして、絶対的な樂觀論の表現である。『デカメロン』は「民衆の笑い」の洗練形態として、この地上にあって、しかも神的恩寵ならざる人間的配慮をもって大団円を成就せんとするところの、「人間喜劇」の展望の精神的な淵源となったのである。最後に、喜劇作品『マンドラーゴラ』と『クリツィア』の観点から、政治的主著『君主論』と『ディスコルシ』に再検討を加える本論文の手続きが正当化される。1500年前後のイタリア半島においては、カステリオーネの『宮廷人〔廷臣論〕』を輩出したところの、プラトニズムを基調とする宮廷文化と、ボッカチオを継承した笑劇文化、つまり「祝祭」の歓喜と哄笑を基調とする民衆文化が、著しく空間的に近接しつつ対峙していた。諸伝記研究が明らかにしてきたように、若きマキアヴェッリはひとりの「中世都市の民衆」として、いまや最高潮に到達した「謝肉祭」の歓喜と哄笑に対して極めて親和的であるものの、終生、宮廷文化のプラトニズムとは疎遠でありつづけ、これを意識的に軽視し、あるいは嫌悪すらしていた可能性が高い。これまでマキアヴェッリの喜劇作品についての真剣な研究を遅滞させてきた事実、すなわちこの元フィレンツェ共和国書記官は、失脚の落胆のなか『君主論』および『ディスコルシ』を執筆したのちに、報われぬ「統治の技術」に関する議論に飽いて、なにか不承不承に喜劇作品を制作したようにみえる事実にもかかわらず、論者によれば、たとえば『君主論』の第15章からも感知されるように、マキアヴェッリがこれら政治的主著を執筆していたまさにそのときにおいても、根源的樂觀論の歓喜に酔い痴れる、ひとりの「笑う民衆」であった可能性が高いのである。『君主論』と『ディスコルシ』の著者は、はじめから「祝祭」における哄笑との親和性を濃厚に帯びた人物であったとされる。したがってマキアヴェッリは、ひとりの「人間喜劇」の制作者として政治論を編んだ最初の人間であったために、このうえなく斬新奇抜な政治哲学を構築することとなった可能性が真剣な考究の主題とならねばならないとされる。

第Ⅱ章では、『君主論』および『ディスコルシ』が、「偉大な伝統」、すなわち古典古代の伝統と聖書宗教の伝統の双方と訣別し、比類なき新しさを帯びることとなったのは、それらが「人間喜劇」の展望、すなわち地上において、しかも人間的営為によって大団円を成就せんとする展望に依拠しつつ倫理学および政治学を構築したことによると思われる。しかし、2つの政治的主著から性急に、直接的に「人間喜劇」としての新しい政治哲学の体系を別括する試みは、必然的に深刻な困難に逢着する。というのもそれらの著者が明示的に古典古代の弟子を自認している事実から容易に予測されるように、両著作には「偉大な伝統」、とくに古典古代の伝統からほぼ忠実に継承された諸教説が、極めて複雑に錯綜しながら混在しているのである。したがって、夾雑物としての伝統の残滓が混入する割合の最も低く、最も純粹に「人間喜劇」の諸原則が表出している喜劇作品『マンドラーゴラ』

および『クリツィア』を分析し、そののちに、これら原則の観点から2つの政治的主著に再検討を加える手続きが踏まれねばならない。このとき、2つの喜劇作品が「謝肉祭」で実際に上演されたという事実、さらに両篇ともにそのことを前提に制作されたという事実を銘記することが肝要となる。こうして本章の目的は2つの喜劇作品から「人間喜劇」の諸原則を析出することにある。それは、以下の2点に要約しうる。すなわち、①「静止」に対する「運動（変化）」の優位。つまり「本性（自然）」の硬直性こそが市民、家門、都市の敗亡の原因であり、運命の変転に直面しておのれの「本性（自然）」を自在に「変化」せしめることで善処するならば、悲運は回避され、大団円が成就される。②新旧の交代。つまり若者が老人に対して、すなわち「新しいもの」が「古いもの」に対して絶対的に勝利せねばならない。

まず『マンドラーゴラ』がリウィウス史書にみえるローマ共和政創建伝説の滑稽化 parody であることが確認される。同喜劇は、ある若者が有夫の貞女、フィレンツェの「ルクレツィア」Lucrezia の誘惑に成功し、恒常的な性愛関係を取り結ぶことで大団円に至る。この喜劇が、ローマ建国史における有夫の貞女「ルクレティア」Lucretia の受難の物語の滑稽化であることは疑いない。「ルクレティア」は、僭主化したローマ王の子息によって強姦されたのち、親族らに復讐を、つまりは僭主の放伐を要求して自害したのであった。この悲劇的事件こそがローマの王制崩壊と共和政樹立の契機となったために、マキアヴェッリの同時代にあって、ローマの「ルクレティア」の名称は共和主義的な自由、遵法性、市民的徳性の象徴と想念されていた。したがって『マンドラーゴラ』は、誰もが古典古代の貞女を連想せずにはいない名称をフィレンツェの淑女に与え、しかもこれが貞節を完全に放棄し、官能的欲望が全面的に勝利する結末を提示することで古典的な自由、遵法性、市民的徳性に対する懐疑を提示していた疑いがある。

次に、喜劇『マンドラーゴラ』の筋書を概観することで、「人間喜劇」の第1の原則、すなわち「静止」に対する「運動（変化）」の優位の原則が抽出される。同喜劇の筋は、官能的欲情の虜となった若者が、亭主である「法学博士の老人」の暗愚蒙昧を出し抜くことで、その貞淑な婦人「ルクレツィア」の誘惑に成功するというものである。「法学博士の老人」が「静止」の、つまりは法的、慣習的諸規範に固執する愚鈍の象徴であることは明白である。この「老人」と「ルクレツィア」との間には子息がなく、一門は断絶の危機に直面していた。それは、運命に対する人間的営為の限界の象徴であるだろう。もしもフィレンツェの「ルクレツィア」が、ローマの「ルクレティア」を忠実に模倣して貞節に固執するならば、劇中のすべての登場人物の悲嘆へと帰結することになる。しかしながらフィレンツェの「ルクレツィア」は、若者と同衾したのちに、おのれの「気性（自然）」をいまひとつの「気性（自然）」へと変態せしめ、賢明にも貞節を放擲し、これとの恒常的な不義密通の関係を結び結ぶのである。その結果、何も知らぬ愚かな「法学博士の老人」は、真実には不義の子であるものの、世間体の上では嗣子となる嬰兒を獲得し、劇中のすべての登場人物が歓喜に沸いて大団円は成就する。しかもこの大団円は、いかなる「機械仕掛けの神」deus ex machina にも依拠することなく、もっぱら登場人物らの策略によって成就するのである。ここに見て取れるのは、固定的規範への、「古い〔古代の〕美德」antica virtù への執着こそが古典的な、したがって悲劇的な結末の原因であり、運命の変転に即しておのれの「本性（自然）」を柔軟に「変化」せしめ時流に適応するならば、地

上における、もっぱら人間的配慮による歓喜が約束されるという洞察なのである。

最後に、喜劇『クリツィア』による『マンドラーゴラ』の補完の意味が考察される。『クリツィア』中、フィレンツェの「ルクレツィア」がめでたく懐妊に至ったことが語られており、2つの喜劇作品は制作者によって意識的に筋の連続性を与えられた姉妹編の体裁をなす。『クリツィア』の筋は「ニッコーマコ」なる助平な「老人」が、美貌の少女をめぐっておのれの息子と争い、敗北してゆくというものである。劇中、官能的欲望に駆られた「老人」は、猛然と諸々の「変化」を試みて運命を制し、ほとんど若者を圧倒しているようにみえるため、ときに『マンドラーゴラ』と『クリツィア』の間に喜劇作者の思想の転換が指摘される。だが、『クリツィア』における「老人」の敗北は、むしろ「人間喜劇」の第2の原則による『マンドラーゴラ』の補完と理解されるべきである。すなわち運命と時流の変転に対しては、おのれ「本性（自然）」を頻々と「変化」せしめることで対処すべきであるものの、ただし勝利を収めるのは「古きもの」、つまり老人ではなく、「新しきもの」、つまり若者であらねばならないのである。色狂いの「老人」、「ニッコーマコ」の名称が喜劇作者の姓名、ニコロ・マキアヴェッリに由来していることは確実視される。晩年のマキアヴェッリは、挫折に終わった自身の最後の恋情、あるいは無念の生涯全体を自嘲することで、「人間喜劇」の第2の原則を確認していたとされる。

第Ⅲ章では、2篇のマキアヴェッリ喜劇から析出された「人間喜劇」の2つの原則のうち、第1の原則、すなわち「静止」に対する「運動（変化）」の優位の原則が、2つの政治的主著においても貫徹されていることを確認する。これをもって、『君主論』における「力量」virtùの観念、ならびに『ディスコルシ』における共和政体論の前例なき新奇さが、先行諸研究に比してより精確に把握されるのである。まず、主として『君主論』に見られる「力量」の術語の多義的用法が分析され、これが何故「偉大な伝統」と、わけても古典古代の伝統と訣別することとなったのかが考究される。しばしば指摘されるように、『君主論』中、ときに「力量」が戦士の男性的徳目、つまりは物理的闘争における卓越性として想念されていることは確かである。しかし、このような狭義の「力量」がこの観念のすべてであったならば、倫理学上の刷新が発生することはなかったであろう。というのも戦士の男性的徳目の称揚は、疑いなく古典古代、あるいは文芸復興期に広くみられた議論なのである。むしろ注目すべきであるのは、狭義の「力量」が「賢慮」prudenzaと結びつき、広義の「力量」を構成していることである。ここにおいて「賢慮」とは、時流の変転に適応しておのれの「資質」、「前進の様態」、すなわち「本性（自然）」を自在に変容せしめる能力である。「本性（自然）」の硬直性こそが、あらゆる君侯、市民や都市の敗亡の、つまり悲劇的結末の根本原因なのである。広義の「力量」を構成する2つの能力のうち、倫理学上の刷新は、むしろ「賢慮」において発生している。『君主論』中、「賢慮」の重要性が肥大するに比例して、狭義の「力量」は遠景へ後退してゆく傾向が見られる。ついに第25章冒頭部分に至り、「賢慮」の観念は「運命」と「神」に対峙する人間の「自由な意欲」libero arbitrio、広義の「力量」の観念そのものと、ほとんど外延を一致させるのであった。『君主論』は、まさしく「人間喜劇」の第1の原則を貫徹することによって、「力量」の観念に刷新をもたらしたことになる。

次に、『君主論』の成立が告白される1513年12月10日付フランチェスコ・ヴェットー

リ宛書簡上、マキアヴェッリが同時代に流行した短編小説、『ジェータとビッリア』中の登場人物のひとりに自身をそれとなく類比していることの意味について考察することによって、上に(第Ⅲ章第i節)得られた結論が補強される。同書簡において、『君主論』執筆期のマキアヴェッリは、おのれを「ジェータ」、すなわちあらゆる存在の「本質」、「形相」、そして「名称」を「変化」せしめ、おのれもまたあらゆる存在へと「変身」するユピテル神の技能を獲得したと申し立てる似非「哲学者」に擬えている。「人間」の「本性(自然)」を「ろば」の「本性(自然)」へと「変身」せしめることすらできる「知識」と「より新しい方法」の所有者に自身を類比する諧謔によって、マキアヴェッリは『君主論』の教説の革新性に関する自己理解を漏洩しているように思われる。すなわち『君主論』の革新性が、「自然」の多様性と流動性を明察して、おのれの「本性(自然)」において「変身」を遂げる「賢慮」、あるいは「力量」の勸説、したがって「人間喜劇」の第1の原則の教示に存していることを、著者自身もまた認識していたように思われるのである。次に確認されるのは、「静止」に対する「運動(変化)」の優位という「人間喜劇」の原則が、『君主論』における「力量」の観念と同様、『デイスコルシ』における共和政体論にあっても貫徹されていることである。古典的政治学の伝統には、ただ「古い城壁」の内部において、つまりは「閉ざされた都市」においてのみ、有徳の政治生活は可能であるという認識が見られる。習俗を異にする外来民との接触は、都市民らの頹廢と拝金の気風をうみ、やがては内紛を惹起する。ただし古典的政治学は、「閉ざされた都市」が運命の変転に対して極めて脆弱であり、断じて不滅性は期待しえないことを承認した。したがって有徳の政治生活の古典的な理想は、「悲劇」の展望、人類の政治的営為に関する根源的悲観論を包蔵していたことになる。『デイスコルシ』もまた、外部に対して「閉ざされた都市」においてのみ、有徳の政治生活は可能であることを認めている。しかし、「閉ざされた都市」とは端的に「悲劇の都市」である。新しい共和政体論は、おそらく「善く生きること」にもまして「ただ生存すること」に強烈な関心を抱いているために、古典的政治学の理想、儂くも麗しい理想を排撃せねばならない。こうして「喜劇の都市」は、「死と滅亡」を回避すべく、不動の政治秩序の理想を放棄して、「運動(変化)」を繰り返す「拡大的共和国」とならねばならないのである。

最後に、共和政体は不断に「諸々の限界」termini を侵犯することによって「死と滅亡」の「悲劇」を回避しようという洞察が、「人間喜劇」の第1の原則の反映であることが確認される。すなわち「喜劇の都市」は、参政資格における「限界」を超越して寡頭的国制を放棄する。そして広範な平民武装と異邦人への市民権の授与をつうじて、支配領域を拡大し、「古い城壁」の「限界」を超越する。さらには必然的に生じる空間的拡大と社会構造の変質に対しては、古来の法制度によって画された「限界」の超越、つまりは建国当初の法秩序の随意的改定をもって対処するのである。これら古典的政治学の諸教説の転倒、斬新奇抜な共和政体論は、すべて「悲劇」の展望と親和的な静態的秩序の理想を排斥して、頻々たる「運動(変化)」により「命数の限界」を超越し、「不滅の都市」を実現せんとする「人間喜劇」の展望の反映であるとされる。

第Ⅳ章では『デイスコルシ』は、「諸々の限界」を不断に侵犯しつづけたローマ共和政の実践、すなわち参政資格の「限界」を撤廃し、「古い城壁」を乗り越えて支配領域を拡

張し、異邦人らの大挙流入に伴う社会構造の変質には古来の法制度の改変をもって対処した実践を、「人間喜劇」の第1の原則、つまりは「静止」に対する「運動（変化）」の優位の原則に一致するとして支持したことが確認される。それは、「古い美德」antica virtù を堅持する不動の「閉ざされた都市」の古典的理念が、やがて逢着せねばならない「死と滅亡」morte e rovina の悲劇的結末を回避せんとする意図に導かれていたのであった。しかしながら、ローマ史研究をつうじて「不滅の都市」の可能性を探求する試みが、明白にして厳然たる「アポリア」aporia に直面することは必定である。すなわち、ローマ共和政崩壊、あるいは地中海帝国の全的滅亡の歴史的事実である。本章において、あまりにも困難なこの「アポリア」を、『ディスコルシ』はいかにして克服せんと企図したのかが究明される。

まず、『ディスコルシ』中、「不滅の都市」の建設による地上の大団円を実現せんとする根源的楽観論が確かに動揺をきたしている諸論説が散見されることが指摘される。「単純物体」がその「資質」、「前進の様態」、あるいは「本性（自然）」において、したがって「形式」forma においてどれほど「変化（運動）」を繰り返そうとも、その「身体」すなわち「素材」materia における老朽化の過程、最終的には死に至る不可逆的な過程に抗うことは絶対的に不可能である。『ディスコルシ』には、これと同様に「混合物体」としての都市においてもまた、参政資格や支配領域、法律や国制、換言するならば「形式」における「変化（運動）」とはほとんど無関係に、「素材」としての市民団の習俗や徳性が不可逆的に劣化、老朽化して、腐敗墮落してゆくという認識が見られる。ローマ共和政の倒壊とは、いわば市民団の不可避的な腐敗墮落ののちに到来した死であった。

次に、『ディスコルシ』の追求する「不滅の都市」の計画が直面した「アポリア」は、「人間喜劇」の第2の原則、すなわち新旧の交代の原則によって克服されていることを確認する。ひとつの全体として把握された『マンドラーゴラ』と『クリツィア』における「人間喜劇」の展望は、単に「ルクレツィア」が「変身」を遂げて、貞操を放棄したのみでは成就しえなかったことが銘記されるべきである。というのも、「ルクレツィア」がいかにほど不貞の歓喜を享受しようとも、その「素材（身体）」における不可逆的な老化の過程と、やがて訪れる死を回避することはできない。「人間喜劇」の展望は、不義密通の帰結としての新生児の誕生、つまりは「素材（身体）」の新生、したがって「始源」principio の回復が、『クリツィア』中に告知されることによってはじめて完成したのであった。永久に反復される新旧の交代、「古きもの」の死滅と「新しきもの」の誕生の心象こそが、根源的楽観論を救済するのである。これと同様、濃厚に「謝肉祭」の歓喜や哄笑との親和性を帯びた「始源への回帰」の心象は、明白に『ディスコルシ』においても貫徹されている。かの「アポリア」の克服の契機となっているのは、人類の種的記憶として普遍的に語られる「大洪水」の伝承である。悠久の歴史上、たびたび「黒死病」、「飢饉」、そして「大洪水」等々の大災厄は人類文明を壊滅させてきたのであったが、その都度に爛熟し、老いる。そして腐敗墮落した人類は、「始源」における習俗と徳性の純朴へと「回帰」してきた。無論、「大洪水」は「天界」あるいは「自然」の作用であるものの、人間的営為は「自然」を模倣する。したがって都市の「素材」としての市民団の習俗と徳性における腐敗墮落が、「大洪水」に比定される異常な人間的作為の衝撃によって、つまりは「始源への回帰」の巨大運動によって矯正されるのならば、「不滅の都市」は可能であるという

のである。

最後に、「人間喜劇」の展望を完成させる「始源への回帰」の巨大運動、すなわち「革新」rinnovazioneこそが、『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の主題であることが確認される。人間の「自由な意欲」をもってする「革新」の運動は、諸々の卓越せる市民たちの最も異常な行為によって発動するという。これら行為は、「始源」に遍在した「恐怖とテロル」を想起せしめることによって、あるいは鮮烈な「模範」として機能することによって、「素材」としての市民団に「新たな生命と新たな美德」nuova vita e nuova virtùを鼓吹するというのである。10年の間隔をおかずして不断に諸々の「革新」が生起するならば、反復的に「素材」の清新は回復され、かくして「不滅の都市」は可能であると断言されている。『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の明示的主题として提示されるころの、ローマ共和国市民らの傑出せる「諸々の行為」とは、厳密に解されるならば、ほかならぬ「革新」の運動なのである。ここでは、「人間喜劇」の根源的楽観論を約束する「始源への回帰」の教説は、特定の市民の個人的な「力量」の所為として語られている。かかる大規模領域国家成立以前の政治的思惟に特徴的な非人格的構造に対する意識の欠落によって大幅に混濁されているものの、『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の主題としての「革新」は、「革命」revolutionの政治現象の極めて原始的な意味内容を帯びている疑いがある。近現代政治史における最も壮大にして、意義深い現象としての「革命」の概念の歴史的変容を瞥見し、これと「革新」の観念との看過すべからざる類似性が指摘される。

結論では、こうしてマキアヴェッリ政治哲学が「偉大な伝統」、つまり古典古代と聖書宗教の双方の伝統と訣別する契機となった展望、すなわち地上において、しかも人間的配慮をもって大団円を成就せんとする「人間喜劇」の展望の全容が、「歴史家、喜劇作者ならびに悲劇作者」ニッコロ・マキアヴェッリによって説き明かされた、と結ばれている。

3 論文の特徴と評価

本論文の最大の特徴は、マキアヴェッリの政治哲学を、かれの文芸諸作品に見られる近代的諸観念の反映として一貫して読み解いた点にある。従来のマキアヴェッリ政治思想研究は、2大政治著作のテキスト分析や思想史的考察に集中しがちであり、かれの喜劇や文芸作品を論じる文芸批評とは交差していなかった。文学史におけるマキアヴェッリ研究は、かれの文芸作品の時代考証や用語法などの個別的な論点に焦点を当て、他方で政治思想におけるマキアヴェッリ研究は、かれの文芸作品を政治的テーマの副次的反映としてしかとらえてこなかったといえる。それに対して本論文は、マキアヴェッリ政治思想の解読軸として喜劇性／悲劇性という枠を設け、喜劇作品に見られる「笑い」のうちにマキアヴェッリの世俗性や民衆性を読み取るだけでなく、政治思想において展開される政治秩序の〈革命〉や〈再創造〉の契機をも読み取り、しかも明快な論旨において『君主論』や『ディスコルシ』のテキストをこうした契機の反映として読み解くのである。

具体的には、静止（＝硬直した法制度）に対する運動（＝状況に応じた賢慮）の優位、老人（＝破滅の運命）に対する若者（＝革新＝始源への回帰）の勝利。マキアヴェッリの喜劇作品に込められたこれら2つの哲学的モチーフを、主に『君主論』と『ディスコルシ』

という 2 大政治著作のテキストのうちに丹念に読み込んでいく視点と手法は、イタリアを含め従来のマキアヴェッリ研究には見られない斬新かつ正確なものであると評価できる。作法や文明を重視する宮廷人文主義の価値観ではなく、世俗的狡知と成功を称賛する民衆芸術的価値観と、そうした価値観を通じた政治秩序の刷新とを、『君主論』や『ディスコルシ』に見いだす本論文の展開も、マキアヴェッリ政治思想の解釈として正鵠を射ているといえる。かくして本論文においては、マキアヴェッリの文芸的テキストの文芸批評ではなく、近代〈革命〉の先駆者マキアヴェッリという政治思想史的結論が提示されることになる。マキアヴェッリ思想の中心に据えられる〈革命〉の原イメージを、『マンドラーゴラ』や『クリツィア』の喜劇性を媒介に、中世文学のカーニバル的混沌性・豊饒性に求めたのも、斬新な指摘だといえる。そしてこうしたカーニバル的世界を一身に担う存在が、政治的に君主なかならず新君主であるという主張も首肯しうるものである。こうした発見は、マキアヴェッリを君主主義者ととらえるか共和主義者ととらえるかという、伝統的な議論の行方にも新しい一石を投じるものであろう。

マキアヴェッリ思想の此岸性・喜劇性を徹底的に強調することで、マキアヴェッリ思想における民主主義と近代哲学との結合を、文芸的側面から提示してみせた点が、総論的にみた本論文の意義であるといえることができる。政治思想の反映を文芸作品に見るのではなく、文芸作品の反映としてマキアヴェッリ政治思想を首尾一貫して読解する手法の斬新性、さらには、文芸作品のうちに哲学を見だし、その哲学を政治的著作のテキスト解釈と結びつける論旨の展開に成功している点は、マキアヴェッリ研究のみならず人文主義政治思想ひいてはルネサンス文化の研究に対する本論文の大きな貢献であると考えられる。マキアヴェッリ前史として 1 章を割いて論じられている、「笑い」の政治哲学的意味についての考察も、従来の政治思想研究にはみられない斬新なものであると同時に、本論文の枠組を設定する適切な導入となっている。

さらに本論文の基本的分析手法にも触れておく。本論文の基本的手法はテキストの理念的分析であるが、しかしマキアヴェッリの主要テキストの文意解釈にのみ終始しているわけではない。逆に本論文は、マキアヴェッリの書簡や多数の研究文献を渉猟するだけでなく的確に理解しながら、論旨を補強するために有効に用いている。各章末尾に付された豊饒な注は、執筆者がマキアヴェッリについての既存の膨大な先行研究やマキアヴェッリの背景となるルネサンス思想への目配りを怠ってはいないことを示している。

次に、本論文の課題ないし本論文への疑問点として審査員より指摘されたのは以下の諸点である。

(1) 本論文の方法と用語について。本論文は、Q. スキナーや J. G. A. ポーコックといったコンテクスト主義的思想史理解の方法に立つマキアヴェッリ研究ではなく、L. シュトラウスに代表される（政治）哲学的手法に立つてマキアヴェッリの近代性を解明する志向性を持つ研究であることをみずから宣言している。そうであるとはいえ、本論文で重要な位置を占める「運命」「摂理」「賢慮」といった諸概念については、それらの含意の思想史の変遷を視野に入れる必要があるのではないか。たとえば、ポーコックの「時間の政治学」やスキナーの「摂理の代行者から征服対象へ」といった整理枠と、本論文における「賢慮」や

「運命」という語の用法との関係について、あるいは、マキアヴェッリの宇宙論に影響しているとされる新プラトン主義や占星術的宇宙論とマキアヴェッリ思想との関係について、どのように理解すべきなのか。

(2) 「民衆芸術の味方マキアヴェッリ」という本論文の観点について。同時代の宮廷人文主義のマキアヴェッリへの影響はあるのか。

(3) 「始源への回帰」と「革新」との関係について。本論文はこの2つを同一視しているように思われるが、マキアヴェッリにおいて両概念は区別されているのではないか。立法者により制定された基本的な国制ないしは国体を前提とした上でのそこへの回帰＝改革と、超歴史的な立法者＝半神による歴史の開闢＝国制ないしは国体の再制定、大洪水や疫病による世界全体の刷新という、3つの相当類似しながら、本質として相異なる3つの次元が、本論文においては時に混同されているのではないか。

(4) マキアヴェッリ思想における力（パワー）の要素について。本論文は、臨機応変な賢慮による革新、人間の作為性の勝利という「喜劇性」を強調するが、マキアヴェッリ思想における権力論的要素や、運命による拘束の側面、すなわちマキアヴェッリ思想の「悲劇性」への着目が弱いのではないか。

(5) マキアヴェッリ思想における「哲学」の位置づけについて。マキアヴェッリの喜劇に、法学（法学者）・医学（薬）・神学（僧侶）は登場するが、哲学者は登場しないことの意味をどう考えるか。「人間喜劇作家マキアヴェッリ」の観点からマキアヴェッリの政治思想を解読する場合、「哲学者マキアヴェッリ」の位置づけはどうなるのか。

(6) 人間喜劇における成功を政治的成功として解釈することの是非について。「家族」としての成功、「共和国」や「君主」としての成功、「人類」としての成功。これらの間の区別が、本論文が描くマキアヴェッリにあるかどうか。

(7) 喜劇性／悲劇性という対概念を、西洋文学の批評史を踏まえて、もう少し精緻に紹介しておく必要があったのではないか。

(8) 本論文はマキアヴェッリの書簡も利用してはいるものの、文芸と結びついたマキアヴェッリの祝祭的世界を掘り下げていくには、私的書簡のさらなる使用が必要であろう。

上記のような不足点は見られるものの、これは本論文が視点をあらかじめ民衆芸術の喜劇性に置いていることから生じる不可避的な帰結であり、今後の課題として指摘しておくだけで十分であろう。

4 結論

本論文は、マキアヴェッリの政治哲学をその主要文芸作品の分析を通して「喜劇の誕生」として描きだすことに成功している。全体として論旨明快であり、独創的でしかも手堅い研究であり、優れた業績である。政治思想研究のみならず、社会科学と人文科学の融合的研究の発展に対して寄与する可能性もまた大きいと思料される。上で指摘した若干の問題点も、研究者の今後の研究の発展可能性への期待の大きさのゆえであり、本論文の価値を損なうものではない。以上の理由によって、本論文は博士（政治学）の学位を授与するに値すると認められる。

審査委員・専門分野

主査 飯島 昇藏 早稲田大学大学院政治学研究科教授、Ph. D. (シカゴ大学) 政治哲学

佐藤 正志 早稲田大学大学院政治学研究科教授 政治思想史

厚見恵一郎 早稲田大学社会科学部教授、博士（政治学；早稲田大学）
政治思想

石黒 盛久 金沢大学人間社会学域歴史言語文化学系教授、博士（文学；金沢大学）
政治文化史